

2019年10月30日

「大学共同利用機関改革の検証ガイドライン（仮称）」に対する意見書

大阪大学 核物理研究センター センター長
素粒子原子核研究所（素核研） 運営会議委員
中野 貴志

素粒子原子核分野の最先端研究は、科学的に必要とする統計量、エネルギー、測定精度等に対する要求が年々増加しているため、研究の大型化および長期化の傾向が著しい。そのような状況の下、大学発のボトムアップのアイデアを具現化し、学術の継続的な発展に寄与するとともにその礎となる人材育成や新技術の創出に限られた予算の中で戦略的に取り組むことが大学共同利用機関に求められている。今回の検証作業が、素核研の改革に役立つためには、どのような観点を追加すべきかという点を中心に以下に意見を述べる。

<運営面>

- 素核研が中核となる共同研究は、素核研が単独で実施しているものは殆どなく、加速器研究施設を始めとする高エネルギー加速器研究機構（KEK）内の他組織との連携や他組織からの支援が必須である。従って、研究の実施にあたっては、素核研の枠を超えた高度な調整やプライオリティ付けが必要になってくる。運営面については、素核研が単独で行う運営だけではなく、国内外のコミュニティの意見を運営に反映するために、KEK が全体としてどのような機能・役割を果たしているかという観点による検証が必要であろう。特に JAEA と共同で行なっている J-PARC の運営については丁寧に検証すべきである。
- 中・長期の計画や方針の決定において、国内外のコミュニティの意見をどのように反映させているか検証すべきである。

<中核拠点性>

- 現在実施中の研究の水準や成果だけではなく、国内外のコミュニティの意見やアイデアを吸い上げ、様々なステークホルダーと交渉して、現実的な将来計画の形にまとめあげる能力や実績も検証すべきだと思う。
- 国外で実施する研究については、素核研が研究で中核的な役割を果たし、そのことが国際的に認知されていることを検証すべきである。

<国際性>

- 大型計画を国際連携で実施する上で、重要なのは本気度（コミットメント）であって、

単なる国外ユーザーの参加数や国際共著論文比率では測ることはできない。素核研で実施中の国際共同研究に参加する国外ユーザーのコミットメントの度合いを上げるための取組や工夫及びそれらの効果を検証するべきである。評価指標として in-kind の物的及び人的貢献を加えることや競争関係にある国際共同研究が国外で実施されている場合はそれらとの比較も有効だと思う。

- 国際的な連携や役割分担を進めるために必要な取組の実施状況を検証すべきである。特に我が国のコミュニティを代表して国外の機関との交渉や連携の窓口としての役割を果たすことは重要であると思う。
- 人材の多様性や流動性の確保のための支援・取組については、それが実施されていることだけではなく効果の検証も必要である。

<研究資源>

- 卓越した研究資源を現在有しているだけでなく、それらを開発する技術やノウハウを蓄積するための工夫や取組をおこなっているか検証すると良いと思う。
- オープンデータに向けた取組や方針策定の状況を検証するべきである。

<新分野の創出>

- 他分野のユーザーが施設や設備を利用する際の支援状況や異分野融合を推進する取組の実施状況を評価の指標に加えるべきである。

<人材育成>

- 大学院生の受入状況や学位授与数だけでなく、学位取得後の進路についての検証も必要である。
- 大学における大学院改革（例：卓越大学院プログラム）への貢献度も評価指標に加えると良いと思う。

<社会との関わり>

- 本格的な組織対組織の産学連携を推進するための取組や支援の実施状況を検証すべきである。
- 子供の理科離れは国際競争力の面で我が国に深刻な事態をもたらす。小中高生に対する情報発信や科学教育に対する取組状況等を評価指標に加えると良いと思う。